

「被害者にはどんな支援が必要でしょうか?」。グループワークやロールプレイを多用し、参加者が自ら考え学び取る力を育む

を開始。2012年からはこの国境を越えた問題に対応すべく、ベトナムとミャンマーにも協力の輪を広げている。

そして、ミャンマーでその事業を支えているのが、日本人専門家の甲木京子さんだ。福岡県内の女性センターで長年、家庭内暴力や性暴力の被害者の支援に携わってきた経験を生かし、現地の人々と共に取り組みを進めている。

**被害者の目線で話を聞く**

ミャンマーでは、人身取引に遭った被害者が帰国すると、シェルターと呼ばれる施設で数日間保護する。社会福祉局と警察の職員が話を聞き、その後、家族のもとに安全に送り届ける。

甲木さんは、シェルターの一つを訪れた時、「被害者が本当のことを話してくれない」「話すたびに違うことを言う」などの悩みを職員たちから打ち明けられた。「被害者との接し方が分からないように、うまく対応できていませんので、うまく対応できていませんでした」と甲木さんは話す。シェルターで働いていても、そもそも人身取引がどういふものなのか十分に理解していない人も多い。このままでは、被害者の社会復帰を支援することは難しい。

そこで甲木さんが企画したのは、シェルターの職員の指導役となる

その晩、ホステルの一室に閉じ込められ、逃げようとしたら捕まってしまう。数日後、中国に連れて行かれ、農家に嫁として売られて6年間働かされました。」

これは、人身取引の被害に遭ったミャンマー人女性の証言だ。なんと警察に逃げ込み、ミャンマーに戻ってこられたという。

人身取引。暴力や脅迫など強制的な手段で、別の土地や国に連れ去り、労働の強制や性的搾取を行う。その対象は、女性や子どもなど社会的立場の弱い人々であることが多い。アメリカ国務省によれば、被害者は毎年約80万人。その約3分の1が東南アジアの人たちだ。

「××国には給料の高い仕事がありますよ」。そんな甘い言葉に誘われ、貧しさ故について行ってしまう。だまされたことに気付いても、もう遅い。

私たち日本人にとっても、遠い国の話ではない。こうした被害者たちは、実は日本にも連れてこられているのだ。日本はその事実を受け止め、すべきことがある。2009年から被害者の保護や社会復帰に焦点を当て、タイで協力



トレーナー養成研修の終わりに参加者に話をする甲木さん(左)。「皆さんは優秀なトレーナーになると確信しています。今回学んだことをぜひ周りの人たちにも伝えてください」



ミャンマー中部、マンダレーのパゴダで支援者たちと意見交換する被害者。「私たちの経験を共有することで啓発活動につながれば」と話す



アジアで多発する  
人身取引

「10代の時、稼ぎのいい仕事がある」と親戚に誘われ、中国との国境近くの町に向かいました。でも

その晩、ホステルの一室に閉じ込められ、逃げようとしたら捕まってしまう。数日後、中国に連れて行かれ、農家に嫁として売られて6年間働かされました。」

これは、人身取引の被害に遭っ

ミャンマー  
from Myanmar



暗闇から  
前に進むために

強制労働や性的搾取などで、弱い立場の人を苦しめている人身取引。その被害が後を絶たないミャンマーで、被害者の社会復帰に向けて日本が立ち上がった。



被害者とカウンセラーのロールプレイ。被害者の気持ちを十分に理解して初めて、的確なカウンセリングができる